

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 6月 10日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520407

研究課題名（和文）日本語と英語における定表現・不定表現の具現形式について

研究課題名（英文）On formal representations of (in)definiteness

in Japanese and English

研究代表者

中井 延美（NAKAI NOBUMI）

明海大学・ホスピタリティ・ツーリズム学部・准教授

研究者番号：30406384

研究成果の概要（和文）：英語などの definiteness とは異質でありながら、日本語にも独自の尺度で名詞句の形式特性を「定的」または「不定的」に二分する仕組みがある可能性を示した。また、名詞句に伴われる意味には「名詞句の形そのものが誘発する意味解釈」が関与することを示した。

研究成果の概要（英文）：This study shows that Japanese noun phrases could have formal features of ‘indefiniteness-oriented’ and ‘definiteness-oriented’ structures, even though the way the language orients the concept to its own NP structure differs from the way English does.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：意味論・限定詞

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者(中井)は、研究開始までの10年余の間、日本語と英語における DEFINITENESS に関する研究、及び、その一環として日本人学習者による英語の冠詞や名詞句の習得に関する研究、その他の日英語比較研究を続けてきた。それによって「日本語名詞句が統語形式上の定・不定を区別する binary system を備えていないことから、英語の(不)定名詞句が担う意味機能が、日本語では“名詞句”という形式だけに収まらない形で具

現されており、そこでは語用論的分析も不可欠である」ことが判明した。この事実を理論的に整理し、多くの言語データによって検証することが本研究の出発点になった。

(2) 研究分担者(西山)は、意味論的・語用論的研究の第一人者であり、名詞句の指示性・非指示性について注目すべき新しい仮説を提案している。そのような意味論的研究は、日英語の DEFINITENESS に関係する研究に資するところが大きい。

## 2. 研究の目的

- (1) 本研究の目的は、DEFINITENESS という概念を名詞句の形式特性として言語普遍的に捉えることを起点に、日本語に相応しい定表現・不定表現の形式区分モデルを構築することである。
- (2) [±definite] という形式特性が、英語では「定名詞句・不定名詞句」として具現化される一方で、日本語でも「限定名詞句・素名詞句」として具現化されることの妥当性を、広範なデータを用いて検証する。
- (3) [定]・[不定]および[限定]・[素]という形式特性を DEFINITENESS の関連概念として捉え、両言語における DEFINITENESS の具現形式（構造）を、名詞句の REFERENTIALITY (指示性・非指示性) に着目して意味論的・語用論的に分析し、体系的にまとめる。

## 3. 研究の方法

- (1) DEFINITENESS (定性) という概念と名詞句の指示性に関するこれまでの研究成果を見直し、統語形式上の二項分類としての DEFINITENESS/ INDEFINITENESS (定表現と不定表現) と、それらと相互作用する意味機能としての REFERENTIALITY (指示性・非指示性) との関係を分析するために必要な諸概念 (理論的枠組み) を整理した。
- (2) 上記1で行った英語の定表現と指示性についての意味論的考察に加えて、語用論的考察を展開した。さらに、日本語における(非)指示性の具現形式をデータを用いて観察・分析し、英語名詞句の定表現・不定表現に相当する日本語の統語形式 (構造) を抽出・選定・分類した。

## 4. 研究成果

- (1) 英語などの (in) definiteness とは異質でありながら、実は日本語にも独自の尺度で名詞句の形式特性を「定的 (definiteness-oriented)」または「不定的 (indefiniteness-oriented)」に二分する仕組みがあると仮定し、その妥当性を示した。具体的には、不定的な具

現形式としての「素名詞句 (すめいしく : plain NP)」、定的な具現形式としての「非素名詞句 (ひ-すめいしく : non-plain NP)」という形で存在する可能性を示し、名詞句の形式特性と意味解釈の関係性を検討した。

- (2) 「素名詞句」と「非素名詞句」という用語は、著者が命名した名詞句分類の名称である。素名詞は「本」「少年」「水」のような普通名詞それ自体から成る名詞を指す。普通名詞とは、ある類 (カテゴリ) に属する個物 (メンバー) のすべてに通じて適用される名称を表すものである。「本」一語なら素名詞それ自体を主要部とする素名詞句であり、「難しい本」「先生の本」「昨日買った本」であれば主要部の素名詞「本」に修飾表現が付いた素名詞句だと捉える。一方、非素名詞句は、表1に挙げたような I - V 群の非素名詞 (表現) を主要部とし、素名詞句でない名詞句のすべてが該当すると仮定している。

表1. 非素名詞(表現)のタイプ

I	「本件」「某所」「当社」	限定詞的な接頭辞が内在する形
II	「東京」「太郎」	固有名詞
III	「私」「彼女」「それ」	代名詞
IV	「学生たち」「子供ら」	一部の複数表現
V	「この本」「例の本」「とある本」「3冊の本」	限定詞+名詞

- (3) 図1、図2の二つの正方形が表している

XNPは、どちらも名詞句という概念による言語表現全体を大まかなイメージで示した言語普遍的な領域があると仮定している。

図 1. XNP 領域の切り取られ方 (英語)

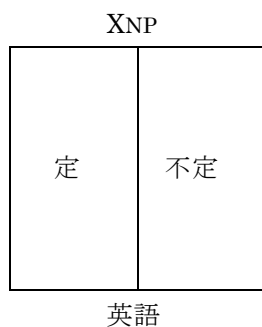


図 2. XNP 領域の切り取られ方 (日本語)



XNPの領域は言語間で完全に一致するものではないが、自然言語の普遍性を踏まえると一定の共通域があると考えられる。その領域内において、英語では定名詞句でないものは不定名詞句であり、不定名詞句でないものは定名詞句であることが前提になる。また、日本語では非素名詞句でないものは素名詞句であり、素名詞句でないものは非定名詞句であることが前提になる。実際には、XNPの領域内において、日本語の[素][非素]が具現される部分は、それぞれ、英語における[定][不定]の両方を一部ずつ包含するものだと考えられる。要するに、英語と日本語の名詞句構造では XNP 領

域の切り取られ方が形式的に異なるといえよう。

- (4) 冠詞を持たない日本語の名詞句構造を形式的に捉えるには、英語のような定/不定の二分法は適合しない。しかし、それは日本語名詞句に形式特性が存在しないということではない。英語の名詞句構造の中で[定/不定]が形式特性として区別されるように、日本語の名詞句構造においても[素/非素]が形式特性として区別される仕組みがあると考えらることで、発話の意味解釈には、名詞句の形そのものによって誘発される部分があることが認識できる。また、そのような認識は、名詞句の形式特性について言語間で何を以て「定的」「不定的」と見なすかという根拠に大きな違いがあったとしても、母語および他言語の名詞句構造を理解する上で重要な鍵となる要素であると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 中井延美、日本語と英語における定表現・不定表現の具現形式について、英語文化研究、査読有、1、2013、pp. 290-300
- ② 中井延美、名詞句構造の理解に基づいた英文法の習得、Journal of Hospitality and Tourism (明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部紀要)、査読有、Vol. 7、2011、pp. 51-61
- ③ 中井延美、大学の一般教養英語クラスにおいて文法知識を意識化させることの重要性、異文化の諸相 (日本英語文化学会学会誌)、査読有、No. 31、2011、pp. 133-151
- ④ 中井延美、大学生の英語学習者における基礎文法の習得について、Journal of Hospitality and Tourism (明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部紀要)、査読有、Vol. 6、2010、pp. 47-57

〔学会発表〕(計7件)

- ① Nobumi Nakai, Why you can't order beer saying "I'm beer" in English, 13<sup>th</sup> International Pragmatics Conference, 2014年9月9日(発表確定)、New Delhi (India)
- ② Nobumi Nakai, On grammatical definiteness of Japanese noun phrases, 11<sup>th</sup> Annual Conference, Hawaii International Conference on Arts & Humanities, 2014年月1月12日、Honolulu (U. S. A)
- ③ 中井延美, 日本語名詞句の INDEFINITENESS のかたちについて—素名詞句と叙述名詞句、日本語用論学会第15回大会、2013年12月2日、大阪学院大学
- ④ Nobumi Nakai, On the way Japanese NPs represent (IN)DEFINITENESS: Formal features and interpretation, Interpreting for Relevance: Discourse and Translation Conference 6, 2012年9月25日、ワルシャワ大学(ポーランド)
- ⑤ 中井延美, 「限定名詞句」の分類についての再考、第27回慶應意味論・語用論研究会、2011年7月31日、慶應義塾大学 三田キャンパス(東京都)
- ⑥ 中井延美, 名詞句に関わる二種類の「限定」について — 指示対象を他の存在と区別して特定する・特定しない、第23回慶應意味論・語用論研究会、2011年4月3日、慶應義塾大学 三田キャンパス(東京都)
- ⑦ 中井延美, 大学における一般教養としての「英語」を考える — 文法知識の意識化の重要性、日本英語文化学会第13回全国大会 英語教育シンポジウム、2010年9月4日(土)、駒澤大学 深沢キャンパス(東京都)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中井 延美 (NAKAI, NOBUMI)

明海大学・ホスピタリティ・ツーリズム学部・准教授

研究者番号：30406384

### (2) 研究分担者

西山 佑司 (NISHIYAMA, YUJI)

明海大学・外国語学部・教授

研究者番号：90051747